

# じやりみち

……被災地支援情報……

第72号 発行日 2002. 8. 10

## 被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL:078-574-0701 / FAX:078-574-0702

Internet <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

E-mail [ngo@pure.ne.jp](mailto:ngo@pure.ne.jp)

口座番号:01180-6-68556 (郵便振替)

### 【はじめに】

震災から7年が経過する中で、私たちは地震直後のある種の“混沌”から抜けだし、新しい社会を目指して日々の取り組みを行ってきた。

この7年を振り返ると、未来に向けての最初の被災地における大きな“踊り場”は5年目を迎えたときだろう。震災直後から「復旧ではなく、創造的復興である」と官・民ともに強調していた。創造的という以上、元に戻るだけではなく新しいしくみを創りだすことも使命であった。

市民活動に関連する制度としては、震災を一つの契機に「特定非営利活動促進法」や「介護保険制度」が施行された。特定非営利活動促進法は、制定以来約100年間変わらなかった民法の一部を改正し、これまで官の担ってきた「公」の領域に市民が参入することを認めたものだ。介護保険制度は、これまで行政が措置として行ってきた“福祉”を、利用者主体の契約に変えるという大変革をもたらした。

しかしここで、あの“混沌”の中から創り出してきた最も大切な価値観は「人間としての共感」ではないだろうかと改めて確認したい。

「人間にとってよかった」「やっぱり人間は一人では生きて行かれへん」「隣の人から信じたらええやん」「困ったときはお互いさま」など、この7年間様々なことをことあるごとに感じ、共有してきた。

そしてこれらの「人間としての共感」を大切に育んできたところに、あの世界中を震撼させた「9・11事件」が発生した。人間としての共感が揺らいだ、震災以来の大きな悲しい出来事であった。

災害というのは、「自然災害」「人為災害」「紛争災害」に分類されるという。私たちは、わずか10年足らずの間に有史に残る規模のそれぞれの災害に遭遇してしまったのである。

アメリカ・イギリスによるアフガニスタンへの空爆は、報道されることはほとんどなくなったが、今もなお続き、8ヶ月に渡る戦禍となっている。他方、再びイスラエル・パレスチナ間の紛争が勃発し、世界中の人々の目が向いた。

けれども、ここでも多くの犠牲者を出しながら、同時に「人間としての共感」が広がった。軍による力の支配に対し、いのちの尊さや平和の大切さを訴える声が、静かに世界に広まりつつある。

復興10年といわれる一つの節目まで残すところあと3年となった。しかし、10年で完全な復興を成し遂げなければならないという焦りに駆られることはない。一見遅々として変化のないようにも思えるが、着実に私たちはよみがえってきた。

(被災地NGO協働センター代表 村井雅清)

## 2002年度の 被災地NGO 協働センター

残暑お見舞い申し上げます。

神戸は連日30度を超す暑さで、事務所内は梅雨明け以来、2週間連続35度を超すありさまで。

今回の「じやりみち」では、6月末に行われた総会で承認された今年度の事業計画の概要と、2002年度の予算、2001年度の決算報告からお届けします。

### 【事業概要】

#### ◎「くらしと地域の一体化」実現の担い手づくり

被災地の市民活動が目指す新しい社会への道筋は、大きな視点では社会のしくみを中央集権・官僚支配から地方主権・地域分権に転換していくものであり、現場の視点からはコミュニティの大切さを具体的な形にするために人々のくらしと地域を一体化させていくものである。

これまで官に任せていた公共の領域を市民自身が担っていくためにも、こうした社会を共に築いていく人々の



存在が欠かせない。私たちは自らや被災地内外の様々な分野で活動する仲間の実践に学びながら、新しい社会の担い手の掘り起こしと育成に努めていく。

○寺子屋事業

#### ◎KOBE版「コミュニティビジネス」の確立

被災地では、コミュニティビジネスが大きな広がりを見せている。コミュニティビジネスは端的にいえば、福祉や環境など様々な地域の課題を、地域の資源を用いて解決していく事業といえる。

事業である以上、採算経営を重視する向きもあるが、それに偏って評価を行うと、もともとコミュニティビジネスが持っている地域社会での性格を損なう恐れがある。私たちはコミュニティビジネスの持つ本来の性格を大切に、大量生産・大量消費・大量廃棄の原理には乗

私たちは大きなことはできません。ただ小さな愛をもってやることはできます。(マザー・テレサの言葉より)

## ・・・被災地支援情報・・・

らない「経験経済」にもとづく事業確立を目指していく。

- まけないぞう事業
- クラフト事業

### ◎「人間としての共感」の「場」の形成

震災後の市民活動を支えてきたものに「場」の存在があった。場には、NGO/NPO間の交流のための場、学習の機会、支援のための多様な機会など様々なものがあり、それぞれの場を通じて「支えあいの文化」が生まれることが、くらしと地域を変えることにつながってきた。

もともと「仮設住宅支援連絡会」として発足した私たちが、1996年から2001年までの5年間、(株)フェリシモの支援を頂きながら取り組んできた「市民版生活支援センター」が築き上げようとしたものは、こういった文化ではなかったかと考えている。これからくらしと地域に対する問題意識を掘り起こし、共有し、深めていく場の形成に努めていく。

- 寺子屋事業

### ◎国内外の災害救援

震災後、KOBЕの市民が行ってきた災害救援活動は、NGO/NPOや企業、学識経験者などが集まって設立した「海外災害援助市民センター(CODE)」という、新たなスタートを切ることになった。

災害後の被害の軽減を考えるのはもちろんだが、日常時のNGO/NPOの地域での活動が災害後の人々のくらしを支えるために重要であることが、震災の経験から分



かっている。災害救援活動のみに特化するのではなく、平常時の活動を災害時に生かしていけるような市民の取り組みの形を探りつつ、今後も救援活動に取り組んでいく。

- 災害救援事業
- クラフト事業

### ◎生活の場からの提言・提案

震災の体験は、それまでのまちのあり方やくらしのあり方に、大きな反省と変革を迫るものであったが、それは被災地だけに止まらず、社会全体のありようを問うものであった。

混沌の中からはじまった私たちの活動は、小さい規模でありながら、コミュニティや福祉・まちづくりといった分野で、紆余曲折を経ながらも確実に生活の場を変えつつある。経済や産業など様々な分野で国家規模の構造改革の叫び声上がる中、被災地ではコミュニティの現場から、自分たちのくらしのために社会を変える動きが、現実のものとして動き始めている。

これから必要とされるのは、こうした現場の実践と、社会全体の変革の動きをどうつなげていくかということだ。地域社会での人々の生活と課題を受け止め、生活の場から新しい社会づくりへ向けての声を挙げていかなければならない。私たちは、現場の視点と社会全体を見渡す視点をつなぐ役割を、担っていきたくと考えている。

- 寺子屋事業
- ネットワーク事業
- (1)連携の場の形成
- (2)生活の場からの提言・提案



被災地NGO協働センター  
2002年度予算  
2002.4.1~2003.3.31

#### 1.一般会計 【収入の部】

項目	金額	内訳	備考
会費収入	630,000		協働会員30・新入会員110
事業収入	8,690,377	500,000	寺子屋事業(会費・母子班上)
		1,345,200	ネットワーク事業(講演料・母子班上)
		5,245,577	災害救援事業(事務局委託・講演料など)
		965,000	まけないぞう事業
		631,600	クラフト事業
寄付金収入	1,440,000		
助成金収入	2,140,000		
受取利息	300		
前年度繰越	3,133,875		
収入計	16,034,552		

#### 【支出の部】

項目	金額	内訳	備考
【事業費】			
スタッフ活動費	5,340,000		
広報事業	1,323,300		
寺子屋事業	595,000		
ネットワーク事業	933,600		
災害救援事業	246,000		
【管理費】	5,030,000		
スタッフ活動費	1,800,000		
事務所賃貸	450,000		②10000×12ヶ月
福利厚生費	70,000		既取付など
旅費交通費	780,000		通勤交通費など
車両運搬・維持費	514,000		
通信運搬費	96,000		
電話代	540,000		
事務用品・消耗品費	48,000		
印刷費	444,000		うち①18013012特別サービス
水道光熱費	240,000		
その他諸経費	18,000		
【クラフト事業へ拠出】	427,577		
【借入金返却】	600,000		
【準備費】	100,000		
【次年度繰越】	1,439,075		
支出計	16,034,552		

#### 2.特別会計

##### (1)まけないぞう事業 【収入の部】

項目	金額	内訳	備考
事業収入	3,030,000		
寄付金収入	960,000		
収入計	3,990,000		

##### 【支出の部】

項目	金額	内訳	備考
スタッフ活動費	900,000		
仕入費	636,000		
事業委託費	24,000		
通信運搬費	193,000		
電話代	72,000		
旅費交通費	210,000		
車両運搬費	60,000		
事務消耗品費	32,000		
材料費	132,000		
印刷費	100,000		
事務所賃貸	420,000		②10000×12ヶ月(事務所)+③60000(倉庫)
準備費	80,000		
寄付金	66,000		売上金の一部を「ふるさと基金・KOBЕ」へ
貸倒償却	100,000		
一般会計へ返却	965,000		
支出計	3,990,000		

##### (2)クラフト事業 【収入の部】

項目	金額	内訳	備考
事業収入	630,000		クラフト売上
一般会計より拠出	427,577		仕入関連初期経費支出
収入計	1,117,577		

##### 【支出の部】

項目	金額	内訳	備考
仕入費	348,030		
仕入関連費用	79,547		
通信運搬費	38,400		
その他諸経費	20,000		
一般会計へ返却	631,600		
支出計	1,117,577		

## ……被災地支援情報……

### 被災地NGO協働センター 2001年度決算(※) 2001.4.1~2002.3.31

#### 1.一般会計 (収入の部)

項目	予算	決算	備考
会費収入	1,000,000	594,487	
事業収入	3,172,370	6,255,706	
	1,190,000	2,147,586	講演料・交通費入金・冊子販売など
	277,200	0	まいたいぞろ
	25,170	2,500	日本ネットワーク支援事業
	1,690,000	3,778,129	事務運営費・被災地ネットワーク・災害救援委員会ほか
		50,121	寺子屋事業
		226,617	「市民社会をつくる」販売事業
		50,750	クラフト事業
寄付金収入	3,000,000	1,829,061	
助成金収入	1,000,000	0	
長期借入金		3,000,000	兵庫県・被災地NPO活動定礎貸付
受取利息	1,500	276	
雑収入		13,325	
前年度繰越	6,010,539	6,010,539	
収入計	14,184,409	17,703,394	

#### (支出の部)

項目	予算	決算	備考
【事業費】			
スタッフ活動費	6,060,000	5,940,000	
広報事業	1,050,300	915,863	
ネットワーク事業	216,000	248,873	
提言・提案活動	24,000	137,230	
災害救援事業	350,000	673,192	
【管理費】	5,278,000	4,925,018	
スタッフ活動費	1,892,000	1,770,000	
事務所賃貸費	720,000	720,000	269,000×12ヶ月
福利厚生費	80,000	65,530	国庫料など
旅費交通費	780,000	852,270	通勤交通費など
通信運搬費	48,000	98,870	
電話代	840,000	581,552	
事務用品・消耗品費	150,000	47,900	
印刷費	450,000	436,170	うち189,180は機器リース代
水道光熱費	240,000	255,411	
その他諸経費	80,000	94,226	
【予備費】	200,000	1,427,470	まいたいぞろ事業へ貸付
		303,873	クラフト事業へ支出
【次年度繰越】	1,005,109	3,133,875	
支出計	14,184,409	17,703,394	

#### 2.特別会計

##### (1)まいたいぞろ事業 (収入の部)

項目	予算	決算	備考
事業収入	8,320,000	4,103,500	
寄付金収入	960,000	1,158,788	
雑収入		4,000	
一般会計より借入		1,427,470	
収入計	9,280,000	6,693,758	

##### (支出の部)

項目	予算	決算	備考
スタッフ活動費	2,400,000	2,070,000	
仕入費	1,584,000	1,241,970	
事業委託費	240,000	97,930	
福利厚生費	90,000	0	
通信運搬費	906,000	272,580	
電話代	120,000	72,415	
旅費交通費	470,000	146,372	
車両運搬費	654,000	446,623	
事務消耗品費	60,000	6,445	
材料費	384,000	273,816	
印刷費	210,800	630	
事務所賃貸費	780,000	780,000	事務所分は60000×12ヶ月・雑費分は160000/年
車両維持費	350,000	270,857	
寄付金	344,000	117,050	しみん基金875890、インド内閣府復興支援委員会 寄付金270000/2000
貸倒償却	200,000	882,080	
その他諸経費		14,990	
予備費	200,000		
一般会計へ	277,200	0	
支出計	9,280,000	6,693,758	

##### (2)日本ネットワーク支援事業 (収入の部)

項目	予算	決算	備考
事業収入	965,170	1,026,650	ネットワーク交通費入金
収入計	965,170	1,026,650	

##### (支出の部)

項目	予算	決算	備考
スタッフ活動費	480,000	480,000	
旅費交通費	450,000	485,460	ネットワーク活動・交通費、国内交通費
福利厚生費	10,000	6,000	
通信運搬費	50,000	40,740	
その他諸経費		11,950	
一般会計へ	25,170	2,500	
支出計	965,170	1,026,650	

#### (3)寺子屋事業(寺子屋・バオ、寺子屋・市民防災)

##### (収入の部)

項目	決算	内訳	備考
事業委託費	112,880		神戸・深津のFPOコンソーシアム事業費
会費収入	260,000		
事業収入	31,000	9,500	冊子販売
		21,500	資料代・印刷費入金
寄付金収入	30,000		
雑収入	200		
収入計	434,080		

##### (支出の部)

項目	決算	内訳	備考
講師謝礼	100,000		
旅費交通費	20,490		
通信運搬費	6,140		
資料製作費	16,500		
印刷製本費	156,177		
食材購入費	81,202		
その他経費	3,447		
一般会計へ	50,124		
支出計	434,080		

#### (4)「市民社会をつくる」販売事業

##### (収入の部)

項目	決算	内訳	備考
事業収入	956,900		冊子売上
寄付金収入	39,030		
送料入金	4,780		
収入計	1,000,710		

##### (支出の部)

項目	決算	内訳	備考
冊子仕入費	684,600		
旅費交通費	41,063		
通信運搬費	44,830		
その他経費	3,600		
一般会計へ	226,817		
支出計	1,000,710		

#### (5)クラフト事業

##### (収入の部)

項目	決算	内訳	備考
事業収入	356,143	302,872	一般会社より前期借入金返出
		50,500	クラフト売上
		1,770	送料入金
寄付金収入	40		
収入計	356,183		

##### (支出の部)

項目	決算	内訳	備考
仕入費	220,473		
旅費交通費	49,540		
通信運搬費	35,420		
一般会計へ	50,750		
支出計	356,183		

#### (6)フェリシモ「もっとうずと・きつと」プロジェクト

##### (収入の部)

項目	決算	内訳	備考
助成金収入	1,844,806		(株)フェリシモより助成金・2000年度より継続 寄付
その他の収入	1,757		
収入計	1,846,563		

##### (支出の部)

項目	決算	内訳	備考
総事業費	1,846,563		
支出計	1,846,563		

#### 3.監査報告書

上記の2001年度決算報告書に偽りのないことを承認いたします。

2002年 6 月 2 日

監事 内田啓徳

監事 笹部浩幸



## 震災から7年

# KOBEはいま

## 外国人はいま・・・

私たちの住んでいる地域にはたくさんの外国人の人たちがいます。改めて、その人たちの存在を気づかせてくれたひとつのきっかけは震災でした。そして、日本の社会制度の問題を浮き彫りにしました。外国人の方々がおかれている問題もその一つです。兵庫県には震災当時約8万人の外国人がいたと言われてます。

### 震災直後の「3つの壁」

KOBEでは震災直後、外国人の人たちには「3つの壁」が立ちだかっていました。1つめは「言葉の壁」です。どこで物資がもらえるのか、避難所はどこなのか、情報が伝達できなかったのです。2つめは「制度の壁」です。これは入国管理法で在留資格というものがあり、例えば震災で勉強や職業が不可能になると同時に在留資格も失われるのです。医療や雇用の問題も深刻です。3つめは「こころの壁」で、たとえ避難所に入ったとしても、文化・習慣の違いで食事が合わなかったり、避難所を出ていったケースも少なくありません。被災地KOBEはこれらの失敗を教訓として、外国人の人たちにも情報がいくように、多言語放送局として「FMわいわい」という民間の放送局が設立されました。

### 「こころの壁」と「制度の壁」

先述の「こころの壁」は、さまざまな異なる文化や生活習慣の違いによって、差別や偏見が生じるもので、社会においてこのような事例は多くあります。例をあげると東京都の石原都知事です。彼はさまざまな場面で多くの人たちに差別発言をしています。これまでも「三国人」発言、障害者や女性などに対して暴言を繰り返しています。公職である都知事がこんな発言をしていいのでしょうか？このような発言を、何も知らない子ども達が聞いたらどう思うでしょう。また、マイノリティに対する差別・偏見は根強く就職・結婚・入居差別など、当たり前のように自分らしく地域に暮らしていける条件は乏しすぎるのです。例えば、結婚などはお互いが好きになって結ばれても、外国人というだけで、親や親戚に反対されるケースは少なくありません。大人はひとり一人正確な事実を伝え、誰もが安全・安心で暮らせる差別や偏見のない社会を築いていかなければならないと思います。

また、「制度の壁」では、日本には外国人の管理制度はありますが、「人権」を守る法律がないとも言われています。外国人登録法・年金制度問題など未解決の問題があります。例えば、16歳になったら必ず外国人は、外国人登録を行い、外国人登録所を常時携帯する義務が課せられています。

### 「兵庫人権フェスタ」の取り組み

このような差別・偏見をなくし、外国人やその他のマイノリティの人たちが人間らしく当たり前のように生きられるような共生社会の実現を目指して、ここKOBEでは2000年から毎年「人権」をテーマに「兵庫人権フェスタ」というイベントを開催しています。主催は外国人・障害者・解放同盟・NGOなどにかかわる団体や個人で、次世代を担う若者が中心です。「人権」と聞いてあまりピンと来る人はいないかもしれませんが、「堅い」「重たい」と思われる方もいるかも知れません。そこで「人権フェスタ」では、まずいろんな人と出会うきっかけ・交流の場づくりを提供しています。そして、それぞれの文化や習慣に触れ、その違いに触れています。おいしい食べ物、すてき

阪神・淡路大震災が発生したのは1995年1月17日。それからこの1月で7年が過ぎました。時が経つに連れ「見えにくくなる」と言われる震災の課題。たしかに壊れた家屋や仮設住宅といった目に見える形での被災の爪痕は消えつつありますが、それでも被災地の悩みが消えたわけではありません。そんな今だからこそ、KOBEのいまを考えます。



在日コリアンの朴さんを招いた今年2月の「寺子屋・パオ」は互いの知り合いの合つ事から。

な民族衣装、多様な価値に触れ、根本は「やっぱり同じ人間なんだ」と当たり前のことを実感します。差別や偏見があるのは、その人を人として知らないからであり、違いを尊重していないからです。勝手な想像や無理解で人を苦しめているのです。お互いのことを知り合えば、とても素敵な友人の輪が広がるはず

です。その反対に、日本人がしてきた歴史的背景やしていることに触れたり、差別や偏見の現実に触れると反省や考えさせられたりもします。でも、その現実を正しく知ること、してはいけないことを正しく理解し、尊重し合うことで、解決策が出てくるのではないのでしょうか？そのような作業が、私たちに必要なのではないのでしょうか。出会い・交流することで、そこからお互いを知り合い・理解し、尊重し合う作業は友達づくりと一緒にです。

### 隣の人から信じたらええやん

ある在日コリアン青年は「在日である以上無関心でいられるけど、無関係では生きていけない」と言っています。私たち日本人は、日本人として当たり前のように生きていますが、日本にはたくさんの外国人や障害者など様々な問題を抱えた人たちが生活しています。人を傷つければ、必ずそのことが自分に返ってきます。社会の中で暮らしていて自分がよければそれでいいのでしょうか？隣人が困っているとき無視していいのでしょうか？ある障害者の人が「隣の人から信じたらええやん」と言っていました。これはまず自分の隣人がお互いのことを本当に理解しているのか、そこから始めようということです。

私たちは今、様々な問題をどう受け止め、自分の問題として受けとめていくかが問われているのかも知れません。現実と向き合ったとき、自分と向き合ったとき、本当の自分の姿が見えてきます。人間は一人一人大切な存在なのです。誰でも生まれたときから人間らしく生きる権利があるのです。世界人権宣言の第1条では「すべての人間は生まれながらにして自由であり、尊厳と権利において平等である」と述べられています。その現実をどう受け止めるかは、ひとり一人にかかっています。

KOBEはあの震災の混沌から少しずつ変化を遂げています。でもまだまだ現状は厳しいです。震災の非日常から日常の様々な社会問題が浮き彫りになり、それぞれの問題をこの震災を受けたKOBEから変えようとしています。このことはもちろん他の地域でも活かせることです。8年経った今、みなさんもまたここで改めてKOBEを想って、KOBEの風を感じてください。またきっとKOBEのひと、みなさんもきっと元気が出るはず

(被災地NGO協働センター 増島智子)

**REPORT****アフガニスタン救援活動**

アフガニスタン救援委員会では、2002年5月27日から6月2日の1週間、鈴木隆太をアフガニスタン現地に派遣して現在のアフガニスタンの状況、また3月に地震が発生した地域の状況などの視察を行いました。

**◆カブール市街**

カブールの状況は、思った以上に穏やかでした。カブール空港に到着した時は、あまりの穏やかさに逆に驚きました。本当に普通の生活がそこには広がっているようでした。車を洗う人、自転車で町を走る人、ブルカを着ないで歩いている女性、はしゃぎながら走り回る子ども達。町は沢山の人や車であふれており、中にはパキスタンから来たとても派手なトラックやバスが、難民の人たちと共にカブールに入ってきているようでした。

しかし、一方で20年以上に渡る紛争によって、破壊されたままの建物も数多く見られました。そこに住んでいた人たちは、親戚などの家を頼ってカブールを離れたり、またパキスタンに逃れる人たちも数多くあったとのこと。

**◆ナハリン…2002年3月25日に発生した地震の被災地**

ナハリンはカブールから北へ車で7時間行ったところにある山岳地帯。バグラン州に入るためにヒンドークシュ山脈の3,000m級の大きな山々を越えなければなりません。その山を越えるとナハリンのあるバグラン州ですが、そこからさらに峠をいくつも越えたところにあります。

この地区は約4,000世帯が住む地域で、その家のほとんど100%が崩壊した地域でした。家の構造はほとんどが土レンガでできており、要所要所で木を使っている程度でした。現在は地震直後にUNICEFやその他のNGOから配布されたテントで生活をしています。この村には灌漑システムができており、この水を利用して水力発電を各家庭などで使っていたようですが、それらも地震で破壊されていました。

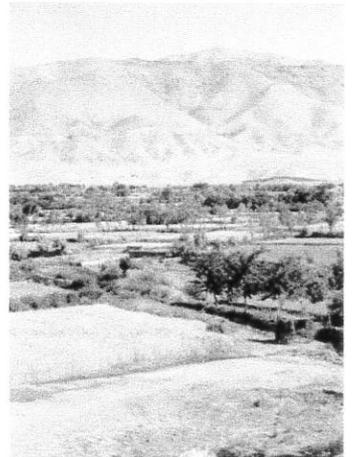
家の再建が始まっているところはなく、住民は外からの援助を待っているとのことでした。また実際に地震の復興について活動をしているNGOもほとんどいないとのことでした。この地域は紛争による被害はほとんどなかったようです、というのも北部同盟の下である、また山に囲まれたところでもあるためそういった被害はあまり受けなかったようです。地震の被害は本当に深刻でした。



テント生活の続く被災者。ナハリンにて。  
(鈴木隆太撮影)



**◆シャモリブレーン…住民主体の村の復興「コミュニティフォーラム」に学ぶ**  
カブールから車で約1時間北へ行ったところに7,000世帯が住むシャモリブレーンという地区があります。この辺りは北部同盟とタリバンが衝突した地域でもあり、この地区にくるまで道路の周りは地雷が多く残されているようです。



シャモリブレーンの様子。  
(鈴木隆太撮影)

ここでは住民の中から代表者を15~20名ほどを住民自身で選出して「コミュニティフォーラム」を組織し、自分たちでまず村の課題は何かということを検討し、そしてその挙げた課題（例えば灌漑整備であったり、住宅の再建やその他）の中からなにが第1優先に解決すべきかを決定し、それに基づいて今度はその課題を解決するために自分たちで資金集めも含めて行動をしていきます。

またこのコミュニティフォーラムは村長をはじめ、この地域のロヤジルガとも連携しています。このフォーラムで決定したことを村長などに報告して実行していきます。現在取り組もうとしているのは灌漑整備で、整備して農業を始めるという計画です。国連の一機関であるUNハビタットは、このコミュニティフォーラムの動きを支援しています。

今後の支援を考える際に、このコミュニティフォーラムは非常に有意義なものであると感じました。それは、今までアフガニスタンの人々は、自分たちの意志とは関係なく、外からの力によって「暮らし」を脅かされてきたのであり、自分たち自身で復興の道のりを築き上げていくことは本当に大切なことだと思うからです。また、この手法をナハリンの被災地を始め、多くの地域で活かすことができれば、と思いました。

(被災地NGO協働センター 鈴木隆太)

## CODE

REPORT

海外災害援助

市民センター

今年1月17日に発足したCODE（海外災害援助市民センター）は、仮事務局を協働センター内に置き、活動のメインとなる災害救援に関しては、「アフガニスタン救援プロジェクトチーム」を6月17日に発足し、6月23日に発生したイラン北西部地震に関しても支援活動をして募金活動を展開しています。

さらに、現在展開中、開催予定の事業をご紹介させていただきます。

6月27日より開始した「NGOことはじめ」は、5つある部会の一つ「市民三角部会」が中心となり、CODEの理念でもある市民の方たちにNGOを身近に感じてもらうため、NGOという立場で多方面でご活躍される講師の方をお迎えして展開しています。（詳細は下記参照）

参加者の方々からお話を聞くと、みなさんも記憶に新しいと思いますが、昨年のアフガニスタン復興会議の参加拒否問題から、NGOに対するみなさんの意識の高さが伺え、20名という少ない定員設定ながら、毎回私たちスタッフも入れると30名近い参加を得るほどの盛況ぶりです。前半に講師の方からそれぞれのテーマでお話を聞き、後半はグループに分かれてディスカッションをするのですが、そこでは活発な意見交換がなされ、スタッフとして参加している私たちも考えもつかなかった視点や意見などとても新鮮な意見を聞くことができます。

「支援プログラム部会」は、実際に災害が起こったとき

CODEとしてどのように支援を展開するかを考えていく部会ですが、9月下旬より専門家である医療従事者（医者や看護士など）が、災害被災地へ行く際の注意点や緊急措置法などの「専門セミナー」を展開します。

最後に「ふ〜ど・ばざ〜る」と題したファンレイジングパーティーを財政部会を中心に開催しています。KOBEの地の利を生かして、在日外国人の方と連携して開催しています。1回目はインド料理、2回目は朝鮮料理、3回目は台湾料理です。

それぞれ国の食文化を通して、その国の歴史や文化などについてお話を聞いた後、食事を囲みざっくばらんに語りあいます。災害発生時において、特に海外においてはその国の人に国の事情を聞くのが一番有効となります。そういう意味においても、この「ふ〜ど・ばざ〜る」を通して、在日外国人の方たちと顔の見える関係を作り保っておくことは今後貴重な財産となります。

このようなセミナーやイベントを通して、「市民センター」としていかにあるべきかをCODEは常に考えていきます。海外の災害救援が活動のメインとなりますが、災害救援を通して市民一人一人が自分自身、自分のまち、くらしにフィードバックしていくことも大切なこととなります。

震災を通して、いわゆる専門家と呼ばれる人たちだけではなく、一般市民の方たちと手を取り合って復興に向かってきたKOBEならではの発信を大切にCODEは活動を展開していきます。ホームページをご覧になれる方は、<http://www.code-jp.org/>をご覧ください。

（海外災害援助市民センター 仲江川 徹）

## CODE REPORT

### イラン北西部地震支援

2002年6月22日午前7時半（日本時間同日正午）頃、イラン北西部にてM6.3の地震が発生しました。CODEでは地震発生の第1報を受け、関係者に情報提供を呼びかけるとともに、独自のルートで情報収集を行いました。その後231人が死亡し、10万人が被災し、60の村が被害に遭ったか、破壊されたとの被害状況があらかになりました。被災地は、首都テヘランから230kmのところにあります。この地域には非常に多くの活断層があり、過去にも1963年には大きな地震が発生し、12,200人もの方が亡くなりました。また1993年にも地震で被害を受けています。イランでは1990年以前は、ほとんど耐震性のない家ばかりでしたが、ユネスコなどが耐震性の重要性などを含む技術向上プロジェクトを行い、それに伴って、研究所も設置されたため、首都を中心に耐震設計が浸透してきました。しかし、まだまだ地方では、土のレンガを積み上げ、屋根も土レンガと鉄を使った材料による建築のため、非常に重い作りになっているようです。

地震発生後の数日後、CODE事務局に神戸を本部に置く建築家のネットワーク組織「リフォームシステム21」より支援を考えているとの電話がありました。これを受けてCODEではリフォームシステム21がイランへ入るために現地での協力機関との連絡や通訳を捜すなどの後方支援を始めました。

またイランからの留学生から「自分の国のために何かしたい」と電話があり、リフォームシステム21のみなさんと、留学生のみなさんとともに、コープECHO龍野店と新長田駅前にて街頭募金活動を行いました。そして、リフォームシステム21の方々がイランへ視察に入ることとなり、その前に少しでもイランのくらしのスタイルについて知っておきたいと共同の勉強会が行われました。

「リフォームシステム21」より3人の視察団がイランに入



り、現地での協力機関となった国際地震工学・地震学研究所（以下IIEES）のメンバーと共に、被災地の視察を行いました。被災地のひとつ、チャングレー村は約160世帯で、今回の地震で129人の死者を出す被害を受けました。村は壊滅状態でした。IIEESから村に避難所としても使える学校を建ててはどうかという提案がありました。テヘランへ戻り、IIEESとの協議をした

結果、チャングレー村に日本の工法を使った平屋建ての学校を建設することになりました。生徒の数は50名ぐらいと考えられます。日本の職人に加えて、韓国の職人もこの計画に賛同をし、参加することになりました。そして、仕上げ工事は、イランの職人の方々に伝統的なイランの用法を使っていたらこうと考えています。名前はJKスクール（Jー日本、Iーイラン、Kー韓国）と名付け、学校には3国の国花の植樹や国旗のモニュメントの設置などを考えているそうです。10月以降は雪が降り出し、物資輸送が困難となるために、早急にこの計画に取りかかりたいということです。

現在はCODEでは学校建設のための募金を集めています。募金にご協力して頂ける方は、下記の郵便振替口座にて、通信欄に「イラン支援」と明記の上、お振り込みください。なお募金の全体の15%を上限として事務局運営・管理費に充当させて頂きます。ご寄付を頂いた方のお名前は随時、イランニュースでご紹介させていただきます。

（海外災害援助市民センター 斉藤容子）

口座番号：00930-0-330579

加入者名：海外災害援助市民センター

\*通信欄に「イラン支援」と明記してください。

REPORT

## 市民セミナー・寺子屋パオ

2000年度の“災害救援と国際協力”（6回シリーズ）を皮切りに、昨年度は、“市民防災シリーズ”と“人間シリーズ”の「市民セミナー・寺子屋」を継続してきました。

今までの経緯は、過去のじゃりみちでもご紹介しておりますので、割愛させていただきます。

今回は、市場至上主義経済や9・11以降顕著になりつつあるアメリカ主導のグローバリズムの台頭の中で、私たちが震災で気づいたのは、「一人の個の存在」を大切にしようということでした。そこで今年度前期の寺子屋・パオのテーマは“ばらばらで一緒”です。なお、本講座は生活復興県民ネットの地域活動推進講座の助成金を受け、6回シリーズで開催しています（詳細は下記参照）。

それぞれ、講師の方々には「個」にこだわって講演をしていただいています。それぞれの講師の方のスタンスで、「個」を尊重しつつ協働体として一つになる、先述いたしました。まさに震災時に私たちが気づいたことの一つです。

そして、この市民セミナー寺子屋パオも「個人」としての参加者が、回を重ねて参加してくれることにより、ネットワークといましょうか、協働体としてそれぞれが連携をもってきていることも継続して開催してきた実績としてあげることが出来るのではないかと考えています。今年度もこの寺子屋パオを当センターで行う数々の事業の中で重要な一つと位置づけ展開しています。

基本的には、シリーズ通してご参加いただきたいのですが、遠方の方で開催日近くに関西にいらっしゃる方は、ぜひ当センターまで足を延ばしてご参加ください！

### 「ばらばらで一緒」とは・・・

真宗大谷派が、1999年の「蓮如上人500回御遠忌」の際に、発信したメッセージ「バラバラでいっしょ」を使用させていただきます。



7月2日は明石まちづくり研究所の松本さんのお話を伺いました。満員御礼の熱気でした。

### これまでの寺子屋・パオ

- 5月29日（水）終了いたしました。  
講師：伊勢谷 功さん（浄土真宗大谷派常願寺住職）  
テーマ：「個に立ち返るとは…～ばらばらで一緒～」
- 7月2日（火） 終了いたしました。  
講師：松本 誠さん（明石まちづくり研究所代表）  
テーマ：「知のネットワークと行動のネットワーク～明石まちづくり研究所の実践から～」
- 7月30日（火）終了いたしました。  
講師：藤原 健さん（毎日新聞大阪本社編集局次長）  
テーマ：「私たちにできること～新聞記者の視点から～」

### 今後の寺子屋パオ

- 8月19日（月）  
講師：土居 哲也さん（在米日本人留学生）  
テーマ：「グローバリゼーションの中に生きる『個』」
- 9月10日（火）  
講師：島田 誠さん（アート・サポートセンター神戸代表）  
テーマ：「市民に根付いた文化の構築」
- 10月  
講師：芹田 健太郎さん  
（神戸大学大学院国際協力研究科教授）  
テーマ：「最後の一人まで」

※今後の寺子屋の詳細な日程は随時ホームページ等でお知らせしていきます。電話などでもお気軽にお問い合わせ下さい。

## 寺子屋講義録



### 2000年度 災害救援と国際協力

B5版78ページ  
500円（〒160円）

NGOの変遷、日本における市民活動の変遷、海外での災害救援の実践と多岐にわたるテーマから災害救援と国際協力のあり方に迫り、最後に地域内国際協力について考えます。講師は芹田健太郎さん（神戸大学大学院国際協力研究科教授）、松本誠さん（神戸新聞情報科学研究所副所長）、増田大成さん（ひょうご農業クラブ理事長）、牧田稔さん（元神戸YMCA副総主事）、当センターの鈴木隆太・仲江川徹・村井雅清です。5回の講義録と、2回の特別講演の要旨を収録。



### 2001年度 寺子屋・市民防災

B5版112ページ  
500円（〒160円）

震災直後、被災地の救急・救命・救援活動で大きな役割を担ったのは、実は市民同士の助け合いと支え合いでした。様々な角度から震災当時の様子を検証し、市民自身が担う防災「市民防災」のあり方を考えます。講師は大津暢人さん（京都市北消防団鳳徳分団長）、魚住好司さん（神戸市消防局指定防災インストラクター）、濱口清子さん（兵庫県健康増進課主幹）、三枝博行さん（ラジオ関西取締役経営企画室長）、神田裕（カトリック鷹取教会神父）です。5回の講義録を収録。

上記2冊とも被災地NGO協働センターで取り扱っています。冊子のお送り先と冊数をTEL/FAX/e-mailで当センターまでお知らせ下さい。TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 e-mail:ngo@pure.ne.jp

# 被災地NGO協働センター アンケート

この度、会員の皆様、「じゃりみち」を読んでくださっている皆様にアンケートを実施したいと思い、このような形でお送りさせて頂きました。

被災地NGO協働センターのこれからを考える上で、是非皆様の忌憚のないご意見をお聞かせください。なお、アンケートの回答につきましては、郵送、FAX、またはEメールにて受け付けておりますのでご協力お願いします。

Q1 当センターを何でお知りになりましたか？

- 友人・知人から    新聞・テレビ等を見て    当センターのチラシから    ホームページで  
セミナー・講演会を通じて    ボランティアに参加した    その他 ( )

Q2 「NGO」と聞いて、何を想像しますか？

Q3 当センターで興味のある活動はどれですか？

- 災害救援活動・国内    災害救援活動・国外    寺子屋セミナー    まけないぞう  
クラフト    提言・提案

Q4 当センターに期待される事はどんな事ですか？

Q5 当センターを通じて、NGOの活動に参加するとしたら、どんな事をしてみたいですか？

Q6 最後に、当センターへのメッセージなどありましたら、お書きください。

アンケート返信先

**fax:078-574-0702**

被災地NGO協働センター宛

tel:078-574-0701 e-mail:ngo@pure.ne.jp

氏名: \_\_\_\_\_

住所: \_\_\_\_\_

tel: \_\_\_\_\_ fax: \_\_\_\_\_

e-mail: \_\_\_\_\_

(お名前、住所などの記入につきましては、任意でお書き下さい。)

- FAXの方は、078-574-0702までご送ください。
- E-mailの方は、Q1からQ6の回答をお書きの上、[ngo@pure.ne.jp](mailto:ngo@pure.ne.jp)までご返送ください。
- 郵送の方は、〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10 被災地NGO協働センターまでご返送ください。

◆◆アンケートにお答えくださった皆様へ抽選で10名様に◆◆  
◆◆当センターオリジナル「子ぞう」プレゼントいたします◆◆

以上です。ご協力ありがとうございました！

# ぞう通信。

第25号 2002. 8. 10



発行所：被災地NGO協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10  
tel:078-511-8698 fax:078-574-0701 <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

KOBEの街から

## 残暑お見舞い申し上げます

「まけないぞう」をご支援頂いているみなさまお元気でしょうか？日本列島は猛暑・酷暑という文字が踊っていますが、夏バテをしないようお気をつけ下さい。

さて、この間、日本や世界では、さまざまな出来事が起きています。下記のようにご紹介しておりますが、「まけないぞう」がアフガニスタンにも届けられました。アフガニスタンでは、9・11米国同時多発テロ後、アメリカによるテロ掃討作戦という理由で10・7以来いまだに空爆が続き、正確な数字はわかりませんが、テロの犠牲者よりも多い3,000人近い一般市民が犠牲になっています。「暴力」に「暴力」で対抗するのは、何の解決にもなりません。まして、何の罪もない人々が犠牲になることは、いかなる理由があろうとも許せることではありません。

KOBEでは震災で、人の温かさ、心の温かさに触れました。みずしらない人達が全国・全世界から集まり、助け合い・支え合いの救援活動を繰り広げました。改めて「人間しとってほんまよかった」と誰もが

感じました。

それなのに、一方で人と人が傷つけ合い、「暴力の連鎖」が深まっていくのは、耐え難いことです。

被災地KOBEから、あの時の震災を受けた痛みの共感・人間の共感を次世代に伝えていかなければならないのでしょうか。そこから支え合いの文化が生まれ、日本から世界へ広がっていくことを心から願っています。そのひとつの例が「まけないぞう」です。作り手である被災者とタオルを送ってくれた支援者の人たちの心のこもったメッセージがたくさんつまって、「支え合いの関係」が広がり、多くの人たちを勇気づけています。今後も「まけないぞう」を通して、たくさんの人たちとつながっていきたくらうれしいです。

最後になりましたが、アフガニスタンへの空爆がますます停止すること願いつつ、同時多発テロの犠牲者、アフガニスタンの犠牲者の人たちに心よりご冥福をお祈りいたします。

### 作り手さんからのメッセージ



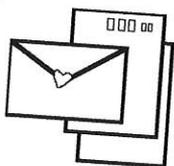
今回は、ひさしぶりに「まけないぞう」の作り手のみなさんの近況をご報告したいと思います。毎回、「まけないぞう」の回収に伺うたびに、いろいろなお話をします。

「まけないぞう」の作り手さんのAさんが、4月から股関節の手術のため入院をしました。これまでは、歩くときにはとても痛そうにしている、外にでるときもタクシーなどを使って外出していました。けれど術後の経過も良く、歩行器を使って歩いています。上半身は元気なので、裁縫でもしようかと笑顔をお話していました。そして歩けるようになったら、いろんな所へ旅行に行きたいと意欲満々でした。今度家の様子を見に一時帰宅をするそうです。7月の末には退院され、「まけないぞう」づくりを再開されています。

いつも酸素を吸引しているBさんは最近酸素の濃度が高くなり、症状が悪化しているのかと心配しましたが、先日の回収でちょっと安心しました。それはちょうど回収時に、酸素屋さんが来ていて、新しい液体酸素の機会を導入しているときのことです。その時に、酸素屋さんが酸素の濃度が高くなったからといって、それぞれ個人差もあるし症状が悪化しているとは限らないと話してくれたからです。医者だから詳しいことはわからないけどと。Bさんはいままで外出時に持ち歩いていた酸素の機械が液体酸素に変わり、今までの機械よりもとても小さくなりウエストバッグのような機械で歩けるようになりました。両手を使えるようになりとても喜んで、「アフガンでもどこへでも行くよ」ととても元気になりました。また、復興住宅では仮設のようなコミュニティがなく、友達がいないといつも言っていますが、この「まけないぞう」に何度助けられたかと・・・少しずつ「まけないぞう」を作ってくれています。

お二人とも身体に大きな変化があり、外に行く機会も増えそう、笑顔で会話が弾みました。もしかしたら、みなさんのお住まいの地域にも行けるかもしれません・・・。

### 支援者からのメッセージ



前略

今年も本校家庭クラブで、「まけないぞう」タオル運動を取り組みました。ダンボール3箱分を送ります。よろしくお願いたします。

鹿児島県立甲南高等学校 家庭クラブ



←学校などで毎年取り組んで「まけないぞう」を支援して頂いてるみなさんは全国にいらっしゃいます。毎年毎年先輩から後輩のみなさんへ引き継がれて、神戸の記憶が引き継がれていることに心より感謝致します。

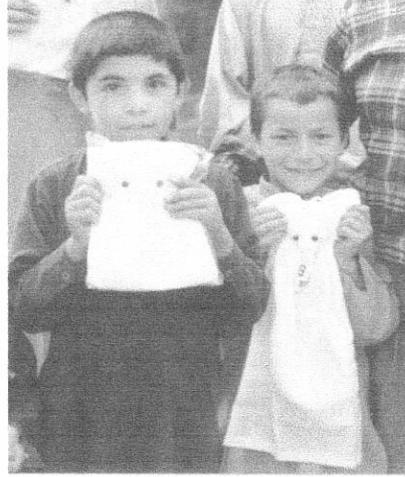
あ・り・が・と・う from「まけないぞう」with LOVE・・・

KOBEから世界へ広がる  
「まけないぞう」の輪

今年5~6月にかけて、「アフガニスタン・救援委員会」(KOBEを中心とするNGO/NPO・ボランティア団体で構成する)のスタッフが、今後の支援の調査の為、アフガニスタン現地を訪問しました。被災地からのプレゼントとして、「まけないぞう」を携えていきました。



「アフガニスタンに届けられませんでした!!」が



アフガニスタンの子ども達が「まけないぞう」を持っている写真を見て、なんだかとてもうれしかったです。同時に、いまここにある「まけないぞう」が遠く離れたアフガニスタンに届けられているのが不思議な感じがしました。神戸から生まれた「まけないぞう」が世界に広がり、作り手さんも「私の分身が行ってくれているみたいね」「私の『まけないぞう』が本当にアフガニスタンに行っただね」と信じられない様子をしながら、とても喜んでくれています。

今年の3月29日以来、イスラエル軍が西岸地区とガザ地区に新たな侵攻を進め、多くの人々が犠牲になりました。そのような事態に憂慮し、私たちに何ができるのかと模索していたところに、阪神・淡路大震災で支援活動を共にしてきた友人が、パレスチナから「人間の盾」として「非暴力」で活動を続け、現地で起きている惨状を伝えてくれました。

5月10日に「戦争反対」の声をあげてもらえるように緊急メッセージを発信しました。そして、6月30日に再び友人からメールが届き、命を懸けてまで活動している彼のメッセージに答える為、次の呼びかけ文と、イスラエル・シャロン政府に対しての抗議声明を発信しました。

私たちのしている事、多分みんなには意味を持たない事だろう。人が殺されてる、子供の死体がころがってる。学校が壊されてる、病院にミサイルが打ち込まれてる、ブルドーザーで家が壊されている、救急車が何台も撃たれている、戦車で踏まれてグチャグチャの死体、病院に行けず母子共に死んでしまった産婦や、それ以外の患者、そして自分の家族や街を守るため戦う男と子ども達。そして、それをただ観ているだけの世界中の人間。そして、伝わる事のない、本当のパレスチナ。それを守ろうとして死んだ沢山の外国人。そして最後まで誇り高かった子供。決して忘れない。沢山流すすぎた血。でももっと死ななくてははいけない。なぜなら、オリーブの木が苦しんでいるから。

でも、本当にここで起こってるんだよ。戦車が目の前をはしってんだよ。爆発で空がひかってんだよ。戦車に潰されてんだよ。自分がいつ死ぬかわからないんだよ。

2002/07/01

私たちは、「いま」パレスチナで「人間の盾」の一人として、非暴力を訴えている彼のメッセージを受け、再びイスラエ

## パレスチナの友人から

「ぞう通信。」の場をお借りして、私たちの取り組んでいるパレスチナのお話をさせていただきます。

ル・シャロン首相に緊急の抗議声明を毎日メールを使って提出しています。

私たちの、この行動に賛同して下さる方は、その賛同の意志を表明し、名を連ねて下さい。

### ◆抗議声明

2002年3月29日以来、頻りにパレスチナの惨状と悲劇の内容が、遠く離れた日本にも伝わって来ます。私たちは、パレスチナとイスラエルが衝突する歴史的背景も少しは理解しているつもりです。しかし、つい先日、6月29日現地にいる仲間からもらったeメールの内容を読むと、おせっかいかもしいが、「とにかく、もうこれ以上殺し合いは止めろ!!」と声を大にして叫びたい。

同じ地球上に生きる一人の人間として、「もう、これ以上尊い命を奪うな!!」と叫びたい。

イスラエル軍の戦車が、子どもたちを踏みつぶしている光景など想像もしたくない。だがそれも事実だ。「子どもたちの命は、無条件に助けなければならないはずだ!!」

シャロン首相!! とにかく武力攻撃は、すぐさま中止して欲しい。

シャロン首相!! 私たち日本に住む一人ひとりにも、「いま」パレスチナで行われていることは、伝わっている。

日本中から、また世界中から「イスラエルとパレスチナに平和を!!」の声が上がってくるだろう。

シャロン首相!! そうなるまえに、即座

に武力攻撃を中止して欲しい。

2002年7月1日

「人間の盾」となって、非暴力を訴えている一人ひとりをサポートする世界中の一人ひとりのネットワーク

中東問題について今まで何も知らなかった、無視してきた私ですが、この友人からのメッセージを受け、無視はできない、何かしなくてはと、一緒に活動している仲間たちと相談して、有志で緊急メッセージや抗議声明文を発信し続けています。中東問題の勉強会などにも参加しながら、いま私たちが日本にいてできることから少しずつ活動しています。

2回目の抗議声明については、呼びかけ文の冒頭にあるように友人からの心からの叫びを聞いた感じがし、とりあえずシャロンに攻撃を止めてほしいという願いから、多くの方に賛同を頂き、メッセージを発信し、シャロンに対して、できる限り毎日メールで抗議声明を発信しています。もちろん、アラファトやブッシュ、日本政府など抗議声明を出すべきところはたくさんあるかとは思いますが。

そして、パレスチナの一般市民だけではなくイスラエルの一般市民の平和や自由を心から祈っています。

その間にも、毎日のように報復合戦が続く、「憎悪の連鎖」が深まり、多くの罪もない人々が犠牲になっている現実が痛みます。新聞などを見ても、「報復」・「自爆テロ」という文字を毎日目にします。

しかしながら、私たちも毎日の事務作業が膨大なため、この問題だけに関わるだけの人も力もなく、それぞれに対応するのは困難を要します。それでも私たちの友人がこの一瞬にも、戦火の中を「非暴力」で「人間の盾」として、活動していることを考えても、今後いろいろ努力していきたいと思っています。

(被災地NGO協働センター 増島智子)

一本のタオル運動にご協力下さい!!

「まけないぞう」の材料となるタオルを受け付けています。新品であれば、宣伝入り、色柄もの何でも構いません。サイズは浴用のフェイスタオルの大きさです。お待ちしております。

# 震災がつなぐ全国ネットワーク オリジナルTシャツのご案内

震災がつなぐ全国ネットワーク事務局

「震災がつなぐ全国ネットワーク」のオリジナルTシャツが完成しました。  
夏のイベント会場での販売に、スタッフのユニフォームに、ぜひご活用下さい。

爽やかな白のボディに、チャコールグレーのバックプリント。  
名前やロゴのないシンプルなデザインは、組織や団体の枠を越え、みんなが協力しあっていきたいという願いから。

イラストは震災後の KOBE から元気を発信し続ける WAKKUN 作。ひとりひとりがつながることから、やがて芽が出て、みんなの思いが未来へ向けて大きく育っていきます。



## ◆Tシャツ

ボディはしっかりとした生地へのピーウェイトを使用しています。室内の普段着から屋外のボランティアの現場まで、カジュアルに着こなせます。

※サイズ表 (単位は cm)

	160	S	M	L	XL(LL)
身幅	46	49	52	55	58

- ◆販売価格： どのサイズも、1着 1,500円 (送料別) です。
- ◆送料： 1着 270円。10着以上は送料サービスです。
- ◆注文方法： 下の注文書に必要事項をご記入の上、郵送または FAX でお申し込み下さい。必要事項を E-mail でお送り下さっても結構です (e-mail : ngo@pure.ne.jp)。
- ◆支払方法： Tシャツは郵便またはクロネコヤマトの宅配便でお届けします。お支払いはTシャツに同梱の郵便振込用紙を用いて、お近くの郵便局より指定の口座にお振り込み下さい。振込手数料はお客様のご負担になりますので、ご了承下さい。

※Tシャツ販売による収益金は「震災がつなぐ全国ネットワーク」の活動に役立たせて頂きます。また長期化する三宅島噴火災害(2000年6月～)の支援のため、Tシャツ1枚あたり100円を、三宅島島民連絡会の活動資金に寄付させて頂きます。

## ◆オリジナルTシャツ注文書

震災がつなぐ全国ネットワーク事務局宛

**fax:078-574-0702**

**e-mail:ngo@pure.ne.jp**

◆お申込み・お問合せ先  
震災がつなぐ全国ネットワーク事務局  
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10  
被災地 NGO 協働センター 気付  
Tel : 078-574-0701 Fax : 078-574-0702

お名前 (団体名)	(ふりがな)				
ご連絡先	ご住所 〒 都道府県				
	Tel :		Fax :		E-mail :
お届け先 (上記連絡先と異なる場合)	ご住所 〒 都道府県				
	Tel :		Fax :		E-mail :
注文枚数	(160)	(S)	(M)	(L)	(XL)
備考 希望配達日などあればお知らせ下さい					

震災がつなぐ全国ネットワークの話題作

# KOBEの検証シリーズ

阪神・淡路大震災とその後の災害に学ぶ「人・もの・金・情報」



**KOBEの検証シリーズ!**  
**物資が来たぞう!! 考えたぞう!!**  
～救援物資の送り方、受け方、配り方～

『救援物資』をとことん追求したこだわりの冊子。内容は、今後気をつけたい『40』の提言、島原・神戸方式、被災地内外43人からのコメント、全国からのご意見・ご提案など、実に盛りだくさん。

編集／震災から学ぶボランティアネットの会  
価格／¥500 [A5版64頁]



**KOBEの検証シリーズ”**  
**ボランティアが来たぞう!! 考えたぞう!!**  
～災害ボランティアとコーディネーターのノウハウ～

災害ボランティアって何? 被災者って誰のこと?  
コーディネーターって何をする人?……?  
この本に答えはありません。でも、考えるヒントがざっしり詰まっています。

編集／とちぎボランティアネットワーク・シャンティ国際ボランティア会・ハートネットふくしま  
価格／¥600 [A5版64頁]



**KOBEの検証シリーズ!**  
**お金がいたぞう!! 考えたぞう!!**  
～災害とお金とボランティア活動～

「ボランティアって無償なんちゃうん?」って、そんなことはありません。これまであまり触られることのなかった、「お金」という切り口から、災害とボランティア活動について考えます。

編集／KOBEの検証「金編」編集委員会  
価格／¥600 [A5版60頁]

**new!**  
2002年3月刊



**KOBEの検証シリーズ!**  
**情報があるぞう!! 考えたぞう!!**  
～いのちとくらしを守る情報とは～

人のいのちとくらしを守るためには何が必要なのか。人にもモノにも金にもつながる支援活動の橋渡し役である「情報」について、被災地での検証や経験の蓄積をもとに考えます。

編集／KOBEの検証「情報編」編集委員会  
価格／¥600 [A5版120頁]



**KOBEの検証シリーズ「別冊」**  
**水害発生!! どうつくる? 水害ボランティアセンター**

1998年全国各地を襲った集中豪雨では、福島・栃木・高知で「水害ボランティアセンター」が誕生しました。その立ち上げから運営、閉鎖までの流れを分かりやすく解説し、今後の緊急時に本当に役に立つ「経験知」を満載しました。

編集／どうつくる? 水害ボランティアセンター編集委員会  
価格／¥600 [A5版76頁]

**FAX注文票** このままこのチラシをfaxしてください。

**fax.078-574-0702**

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10  
震災がつなぐ全国ネットワーク事務局宛(NGO協働センター内)  
TEL 078-574-0701 / E-mail ngo@pure.ne.jp

「物資が来たぞう!! 考えたぞう!!」	___冊
「ボランティアが来たぞう!! 考えたぞう!!」	___冊
「お金がいたぞう!! 考えたぞう!!」	___冊
「情報があるぞう!! 考えたぞう!!」	___冊
「どうつくる? 水害ボランティアセンター」	___冊注文します。

※送料実費  
※本の発送時に振込用紙を同封致しますので到着次第お振り込み下さい。

お名前: .....

お届け先: .....

TEL: ..... FAX: .....

E-mail: .....@.....